

# Popjack Chameleon

ポップジャック  
カメレオン



**Renford Reese, Ph.D.**

All rights reserved. Without limiting the rights under copyright reserved above, no part of this publication may be reproduced, stored in or introduced into a retrieval system, or transmitted, in any form, or by any means (electronic, mechanical, photocopying, recording, or otherwise) without the prior written permission of both the copyright owner and the above publisher of this book. This is a work of fiction. Names, characters, places, brands, media, and incidents are either the product of the author's imagination or are used fictitiously. The author acknowledges the trademarked status and trademark owners of various products referenced in this work of fiction, which have been used without permission. The publication/use of these trademarks is not authorized, associated with, or sponsored by the trademark owners.

### **Edition License Notes**

This ebook is licensed for your personal enjoyment only. This ebook may not be re-sold or given away to other people. If you would like to share this book with another person, please purchase an additional copy for each person you share it with. If you're reading this book and did not purchase it, or it was not purchased for your use only, then you should return to [Smashwords.com](http://Smashwords.com) and purchase your own copy. Thank you for respecting the author's work.

\* \* \* \* \*

# ポップジャックカメレオン

レンフォード・リース、Ph.D.

心に響く多文化教育用物語

Copyright © 2010  
Renford Reese  
All Rights Reserved.

See Dr.Reese's other multicultural education materials at: [ColorfulFlags.org](http://ColorfulFlags.org)

# CHAPTER 1

ある春先の朝、ポップジャックという名前の新聞少年が、一輪車を押して家から出てきました。そして大きな松の木の下で釣りをしている男の人のところに行き、隣に座りました。ポップジャックのほうを向き、微笑みかけるその男の人をポップジャックはパッパと呼びます。本当のお父さんじゃないのだけど。パッパの頭には白髪がところどころあって、いつも新鮮なパインの香りがします。それはいつもパッパが釣りをしながら何時間もこの松の木の下にいるから。パッパとポップジャックは、この木の下で、バラク・オバマと彼が世界に向けたメッセージについていろんな話を長いこと話したことがあります。ポップジャックは、社会を1つにするんだというオバマ大統領のメッセージに感激したのです。

「おはようパッパ。」肩に固定させていた新聞とグッズ・バッグをおろしながら、ポップジャックは、あいさつしました。

「おはよう、おはよう、ポップジャック。元気かい、ジュニアポップ？」パッパが聞きます。

「元気だよ。いつぼくとワンオンワン・バスケットを付き合ってくれるの、パッパ？」  
「つま先の手術が終わり次第さ。バスケットでは容赦しないからな。クロスオーバー、トスオーバー、フィンガースクープ。危ないぞ。ちゃんと見てないとスラムダンク決めるからな、ジュニアポップ。つま先をなおすだけさ。」

ポップジャックはパッパに微笑みながら、「つま先の手術が終わったらだね。いつなの手術は、パッパ？」と言いました。

「手術はお金がかかる。ずっとお金はためているがね、まだあと500ドル足りない。コートに戻れる日が待ち遠しいよ。」

「パッパがプレーしているところ見たいよ。あ、もう配達に行かなくちゃ。」  
ポップジャックは立ち上がり去ろうしましたが、まるで何か忘れ物でもしたように突然振り返り、「パッパ、ちょっと聞いていい？」

「なんだい、ジュニアポップ？」

「新聞を配っているときさ、パドルポップがケインポップを訪ねているところを見たことないし、ケインポップがスティックポップを訪ねているところも見なかったんだ。なんだか、ポップのみんなはそれぞれの地区の仲間としか付き合わないようだけど、、、なんでだい？」

パッパは、ポップジャックを見て、ニコッと思案ありげほほえみしました。パッパには難しく答えられません。なぜなら彼もみんなが仲良くしないこの状況に困っていたからです。

ポップジャックとパッパは、ポップビルという町に住んでいます。ポップビルは、美しい緑がかった湖を囲むところにあり、その湖の真ん中には小高い丘状の小さな島が浮かんでいます。この町の人々の名字はみなポップから始まります。ポップジャックはみなしごで、湖を直接囲むレークパークにある倉庫に住んでいます。毎日一輪車に乗って公園を走るとき、たくさんの人がそこで遊んでいるのを見かけます。でも、奇妙なのは、いつも人々はグループごとにかたまっているのです。パドルポップの人々は湖の近くでピクニック、ケインポップの人たちは遊び場の近くでバレーボール、スティックポップ地区の人は湖に浮かぶ小島に向かってボートを漕いでいるのを見かけたりします。ブランチポップのみんなは湖の周りを自転車で回っています。

「ポップジャック、いい質問だよ。私はもう20年もこのコミュニティをまとめようとかんがっているが、だめなんだ。お前の言う通りだ。みんな自分の仲間としか付き合わない。何も一緒にやろうとしない。お互いを訪ねることもしないし、遊びもしない、敬ってもいない。何もなし、だ。情けないよ。」

パッパは続けて20年前の出来事を話してくれました。連邦政府がポップビルにコミュニティの改善に10万ドルくれました。ポップビルの各地区を代表する議員が少しでも大きな分け前をほしがりました。彼らはそれぞれに、自分の地区が一番改善を必要としていると主張し、結局そのお金をどう使うか決めることができませんでした。連邦政府はそのお金を取り上げ、今日までみんなお互いに腹を立てたままなのです。

「ポップビルはもう昔のポップビルじゃなくなった。」、とパッパは低い声で言い、静かな湖を見つめました。「みんなをもとに戻そうとかんがっているが、無理そうだ。」

ポップジャックは興味深くその話を聞いたのでした。

パッパは続けて少し大きな声で、「ポップビル・チャレンジを見てみろ。グーンズが1回目から20年間ずっと勝ち続けているだろ。湖のこっち側のみんなは、まとまってグーンズをやっつけようって気はないようだ。みんな自分の地区からメンバーを集めて競いたがっているんだ。」

グーンズは、湖の反対側に住む人々で、ポップジャックの経験から言うと、彼らは学校のいじめっ子でした。ポップジャックは、パドルポップ地区、ケインポップ地区、スティックポップ地区、ブランチポップ地区に友達がいました。でも、彼に言わせれば、グーンズの子供たちは誰も、親切ではありませんでした。

「じゃあ、パッパ、配達に行かなきゃ。オバマ大統領は、ぼくに何かしてほしいと思うんだ。」ポップジャックは、一輪車に飛び乗り、口笛を吹き走り去りました。

## CHAPTER 2

ポップジャックの最初の新聞の配達先はパドルポップ地区。まだほとんどの人がお家で眠っています。新聞を取りに2人の人が出てきました。男の人が、自宅前の芝に膝まずいて「除草機」を使っていました。この除草機で彼の手は痛くなっていました。

「ブエノス ディアス セニョール(おはようございます、おじさん)。コモエスタス ウステ(お元気ですか)?」ポップジャックは尋ねます。おじさんが顔を上げ、ポップジャックに手を振ります。「ムイ ビエーン(元気だよ)、ポップジャック。イ ツー(君はどうだい)?」「トーダ エスタ ビエーン(すべて順調です)。新しいストックトン 除草機を使っているんですね。使い心地はどうか、パドルトンさん?」

「ああ、大丈夫だが、手にたこができるんだよ、アミーゴ(友達)。」

ポップジャックは、バッグに手を伸ばして言いました、「おじさんにちょうどいいものがあるよ。」

「何だい、ムチャチヨ(少年)?」

ポップジャックは手袋を差し出して、パドルトンおじさんに付けさせました。「アフリカのものだよ。」とポップジャックは言いました。

「いいねえ、ポップジャック。アフリカ産かい?」  
「祖国から来たんだよ。」ポップジャックは答えます。

「何でできているんだい?」パドルトンおじさんが尋ねます。

「えーと、えーと、世界で一番頑丈な皮って何?」とポップジャックが聞きました。  
「さあな。ワニ皮かゾウ皮じゃないかな。」

「それだよ!」ポップジャックはパドルトンさんにうなずきました。「この手袋は、ワニ皮とゾウ皮のスペシャルブレンドなんだ。」

「おお。」パドルトンさんはまた手袋をまじまじと見ました。「いくらで売ってくれるかい?」

ポップジャックは一瞬ためらい、答えました、「めずらしいものだから売りにくかったけど、でもおじさんのためだから売るよ。なぜかって、それはおじさんが最高だから。。。20ドルでどうですか?」

「決まり!」、とパドルトンさんは大声で言い、ポップジャックにウインクしました。「ありがとう、ポップジャック。で、私は最高かい?」

「最高だよ。」ポップジャックは、パドルトンさんに微笑みかけ、一輪車に乗りました。

ポップジャックは後ろを向き、もう手袋を使っているパドルトンさんに、「特別な手袋、しっかり使ってね。アディオス(さよなら)!」

ポップジャックは、次のパドルポップの家に行きました。友達の一人であるポップチャートが、ちょうど家から新聞を取りに出てきていました。

「どこにも行かないで。ちょっと待ってて。」とポップチャートはポップジャックに言いました。「私のパパが何かあなたに言いたいことがあるんですって。」ポップチャートはお父さんと呼びに家に入りました。

パドルワトルさんが家から出てきました。ポップジャックは一輪車でぐるぐる回っていました。パドルワトルさんが近づいてきたので止まりました。

「ブエノス・ディアス(こんにちは)、ポップジャック。」  
「ブエノス・ディアス、セニョール(こんにちは、おじさん)。」とポップジャックもあいさつしました。

パドルワトルさんは一輪車に乗るポップジャックを観察し、彼が肩に担いでいる重い新聞のバッグを見ました。そしてしばらく考えて、ガウンのポケットからオレンジを出しました。驚いたことに、パドルワトルさんは、そのオレンジをポップジャックに渡し、ポップチャートにもう CD を売らないように言いました。

「うちの子は小遣いを全部君が売る CD のために使ってるんだよ。」とパドルワトルさんはポップジャックに言いました。「もう娘に売らないでくれ。」

「わかりました。」ポップジャックは返事します。「ポップチャートに後で公園に来るように言ってくれますか? ありがとうございます、アディオス(さよなら)。」ポップジャックは、彼が信頼する茶色い一輪車に乗って次の地区に向かいました。

## チャプター 3

次の配達先は、ケインポップ地区。ポップジャックは数人のケインポップのお年寄りがそぞろ歩きしているのを見かけました。男性は杖をつきながら歩いており、その横で奥さんが彼の手を握っています。女の人が、ポップジャックがたった今家の前の階段に置いた新聞を取りに出てきました。

「おはようございます。いかがですか?」とポップジャックがケインポップ夫人にあいさつします。

「おかげさまで。あなたは元気?」とケインポップ夫人もあいさつします。

「元気です。ケインポップ夫人、ぼくはいつもケインポップさんはポップビルで一番の果報者だって言ってたんですよ。だってケインポップ夫人が奥さんなんだもの。」

「まあ、そんな素敵なことを言われたの、初めてだわ。ちょっと待っててちょうだい。」ケインポップ夫人は言いました。

彼女は家の中に入り、おいしいものがたくさん入ったバスケットを持ってきて、ポップジャックにあげたのです。

「ぼくに? もらえないよ。」ポップジャックは本当にびっくりしました。

「あなたのものよ。もらってちょうだい。すばらしい新聞少年でいてくれるから。あなたはいつも時間どおりだし、新聞を正しいところに置いてくれるもの。」

ポップジャックは、歯をいっぱいに見せて大きく微笑み、そして言いました、「ぼくずっとこのバスケット大切に作るよ。ぼくの心をいつも温かくしてくれるものになるよ。」

ポップジャックは次のお家に行きました。新聞を配達する前に、一輪車を止めて、バスケットに何が入っているのか見ました。ケインポップ夫人は、レモンソーダ、キャンディー1袋、バナナ1本、ピーナッツバター、ジェリーサンドイッチをくれました。それとまんが本とミニチュアのおもちゃも。

「そうだ、これで2ドルかせげるぞ。これで3ドルくらい。ポップクイズにキャンディを少し売れるし。わお、すごいものばかりだ。バスケットはぼくのもの。」とポップジャックは心の中で思ったのでした。パドルワトルさんがくれたオレンジも取り出してバスケットに入れました。

ポップロックのお姉さんが、バッグを整理しているポップジャックを見て、新聞を取りに出てきました。

「ハイ、ポップジャック。」ポップロックのお姉さんが新聞を拾いながら言いました。「弟に高い宝石を売るのをやめてちょうだい。間抜けに見えるし、あなたのせいで弟はいつもお金がないのよ。」

そう言えば、星座は何？」ポップジャックが尋ねます。

「しし座だけど、何で？」

「ルビーのネックレス持ってるんだ。君の誕生石。君のきれいな肌の色に合うと思うよ。インドからのめずらしい石だよ。君の好きな色は何？」

「青と黄色。」ポップロックのお姉さんは答えました。

「完璧だよ。」ポップジャックは叫びました。「この石は、君の気分によって色が変わるんだ。ハッピーなときは黄色になるし、ブルーな気分のときは青になるんだよ。」

「本当？ すてき！」ポップロックのお姉さんは興味津々です。「いくらでなら売ってくれるの、ポップジャック？」

「手放したくないんだけど。でも実は、宝石店で52ドルで売ろうとしてたんだ。でも君はすばらしい人だから、特別価格にするよ。20ドル。」

「すごい。半額以下じゃない。」ポップロックのお姉さんは興奮しています。家に入り、お金を取って、彼に払いました。

ポップジャックはネックレスを彼女に渡し、こう言いました、「ポップロックに、今日公園で会おうって伝えて。さよなら。」

「バイ、ポップジャック。」彼女は手を振りました。一輪車に飛び乗りながら、ポップジャックは缶と白い紙くずが道端に落ちているのに気がきます。一輪車を止め、缶と紙くずを拾いあげ、青いリサイクルボックスに入れました。

## チャプター 4

ポップジャックは一輪車をこいで次の地区に行きました。スティックポップが住んでいるところです。新聞バッグが軽くなっていきました。そして少しずつ楽しくなっています。日差しが背中を温め、風がやさしく顔をなでます。空気の香りをかぐと、ベーコンとソーセージのにおいがしてきました。おなかが鳴ったので、ケインポップ夫人からもらったバナナを取り出して食べました。

「こんにちは、スティックトンさん。アンニョハセヨ(こんにちは)。」、とポップジャックは家から出てくる男の人にあいさつしました。

「こんにちは、ポップジャック。アンニョハセヨ(こんにちは)。」とスティックトンさんもあいさつしました。

「良い1日を。アンニョンヒ カセヨ(さよなら)。」、とポップジャックは彼に言いました。

「コマッサムニダ(ありがとう)、ポップジャック。」スティックトンさんも返します。「ところで、うちの息子のポップクイズに本だのキャンディだの売らないでくれよ。小遣いを全部君に使ってるだろう、ポップジャック。キャンディは歯に悪いし、君が売る本は図書館に行けば借りられる。」

「まあそう言わないで、おじさん。」、ポップジャックは彼に微笑みました。

「ところで、おじさんがとても気に入りそうなゴルフセットがあるんだけど。スペインのものさ。ゴルフはスペインで発明されたんだよ。おじさんは最高の人だから、特別価格にしておくよ。」

ポップクイズが、ポップジャックが父親と話しているのを窓越しに見つけ話をしに外に出てきました。

スティックトンさんは、「スペイン？ それは知らなかった。驚いたな。俺たちが発明したとばかり思っていたが。」、と言いました。

「違うよ、パパ。ゴルフが発明されたのはスペインじゃない。」ポップクイズが口をはさみます。「ローマ人がシーザーの時代に似たようなゲームをしていたんだ。でも今のようなゲームはスコットランドが発祥さ。」

「スコットランド？ それは確かか？ アメリカが関係あると思うが。。。」

「違うよ、パパ。セント・アンドリュースが世界で一番古いゴルフコースで、スコットランド人は、16世紀にはそのコースを使っていたんだよ。」

「それでも私たちも何か貢献していると思うがね。アメリカのスポーツだろう。」ポップクイズのお父さんは、まだ納得していません。

「アメリカは18世紀後半に正式に建国されたんだよ、パパ。」ポップクイズは変な顔でお父さんを見ました。

ずっと注意深く2人の話を聞いていたポップジャックが、やっと話に加わりました。「そうです。スペインかスコットランドが発祥の地です。2つの国は互いにとても近くにあります。」

「そうでもないよ。」ポップクイズがポップジャックのほうを向き、同じように奇妙な顔をします。「スペインとスコットランドは1,322マイルも離れているんだよ。ポップジャック、キャンディ持ってる？」

「だめだよ、ポップクイズ。キャンディの食べ過ぎは歯に良くない。君は頭がいいのに、キャンディが良くないってことは知らないんだから。これからはもっと野菜を食べて、ミルクを飲まないよ。」ポップジャックが言います。

スティックトンさんが、ポップジャックを見て満足げにニコリとします。「そうだ、君からも言ってくれ、ポップジャック。」そして息子に振り返り、「今ポップジャックが言ったことを聞いたろう？ もっと野菜を食べて、ミルクを飲まなきゃだめだ。息子にアドバイス、ありがとうな、ポップジャック。」

「どういたしまして。」ポップジャックが返事します。

「わけないですよ。そのためぼくはここにいるんだから。」そして、ポップジャックはポップクイズに向かって、「あとでいつも集まるところに来てよ、ポップクイズ。じゃあね。」と言い、立ち去りました。

ランチポップの地区で、ポップジャックは、若い男の人が車を洗いながら聞き覚えのある歌をハミングしているのを見つけました。ポップジャックがそれに合わせて口笛を鳴らすと、その若い男の人が顔を上げ、手を振りました。ポップジャックは、ランチバーン夫人がきしむドアを開け新聞を取りに出てくる音を聞きました。彼女はまだナイトガウンを羽織り、頭にカーラーをつけたままです。

「こんにちは、ランチバーン夫人。ニーハオマ(こんにちは。ご機嫌はいかがですか)?」

「まあまあよ、ぼく。ニーハオマ(あなたはどう)ポップジャック?」

「ランチバーン夫人、毎日たいへんだけど、でも毎日よくなるようにがんばってるんだ。」

「まあ、素晴らしいことね。明日うちに来なさい、何か作ってあげるわ。」

「伺います。ランチバーン夫人、1つ秘密を教えてください、ご存じないといけないから。ランチバーン夫人がポップビルで一番料理が上手って評判ですよ。」

「ほんとにかわいい子ね。じゃ、明日ね。」ランチバーン夫人は、ポップジャックにやさしく微笑みかけました。「そういえば、ポップジャック、うちのポップタートにポップターツを売るのやめてくれないかしら? 夕食が食べられなくなるのよ。シーシェ(よろしくね)。」

ポップジャックは微笑み返し、「ブクウチ(わかりました)。」、と言い、そしてこう頼みました、「ポップタートに公園で会おうって伝えてくれませんか? シェーシェ(よろしくお願いします)。では、ツアイジエン(さよなら)、ランチバーン夫人。」

ポップジャックは、ランチバーン夫人が支払いに困っていることを知っていました。それで彼は一輪車を止め、バッグからいくばくかのお金を出し、封筒に入れ、道路沿いにある夫人の郵便受けに入れました。

道を走っていると、2人の子供がけんかをしているのを見かけます。するとポップジャックは彼らにロリポップを投げました。彼らは、元気よくお礼を言い、けんかをやめました。

また走っていると、今度は重そうな買い物袋を持った年配の女性が道路をなかなか渡れないでいます。ポップジャックは、一輪車に乗ったまま、おばあさんの袋をつかみ、手を握り、一緒に渡ります。

## チャプター 5

その日の午後、ポップジャックはレークパークの集合場所に歩いて向かいました。ポップロックが踊っているのが遠くから見えます。ポップジャックはバッグに手を伸ばし、派手な時計を出し、身につけました。彼は、ポップロックがあとでその時計のことを聞いてくるのがわかっていたのです。

ポップロックがポップジャックに近付いてきたので、ポップジャックは「元気かい?」と聞きます。

「元気だよ。調子はどう、ポップジャック?」ポップロックもあいさつします。

「新しいムーブ見せてよ、ポップロック。」

「じゃ、これ見て。」とポップロックが踊ります。「ポップビルで一番すごいムーブだぜ。」

「ポップビルで一番のダンサーだもんな。」

「ありがとう、ポップジャック、サンクス。」

ポップジャックは腕時計を見ながら、「今何時? ほかのみんなはどこ?」、と聞きました。

ポップロックはすぐにポップジャックが身につけている腕時計に目をとめ、「わー、とてもいい時計をつけているね。どこで手に入れたの、ポップジャック?」

「僕のとても特別な人がくれたんだよ。僕には深い価値があるんだよ。ほら、つけてみなよ。」

ポップジャックは留め具を外し、ポップロックに時計を渡します。ポップロックは時計を受け取り、少し見とれて、身につけました。そして踊り始めました。

「わお、このムーブをしているとき、この時計すごくよく見えるな。」ポップロックは、くるくるとポップジャックの周りを回り、腕でウェーブしました。滑らかに腕をクロスさせ胸の前で動かします。「女の子たちはみんなよろこぶぜ、ポップジャック。」

「ああ。」

「こんな時計どうやったら手に入るんだい?」

「それは無理だよ、ポップロック。1点ものだし、ロシアから来たんだ。」

「ええ、ロシア? 遠いな。」

ポップジャックは、ポップロックをもの珍しそうに見て、「本当に気に入ってるの? 本当はあげたくないんだけど、君は僕の親友だから、20ドルで売ってあげるよ。」

「すごい。」ポップロックは20ドル札を出し、ポップジャックに渡しました。

お金を受け取る前に、ポップジャックは、最後にもう一回時計を持ってもいいかとポップロックに尋ねました。ポップジャックは目を閉じ、時計を胸にあて、キスをして、ポップロックに返しました。

残りの友達も、そのあとすぐに到着しました。ポップクイズは、ロリポップをしやぶっています、ポップタートは、ポップターツの包み紙をはがしています、そしてポップチャートは、歌っています。みんなあいさつをかわし、腕をからませました。

「元気、ポップジャック、ポップロック？ いい時計だね、それ。」と、ポップクイズがすぐに気づきました。

「うん、すごくいい。」ポップタートも時計を見ました。

ポップロックは、自慢げに時計を見て、「そう。すごくいいだろう？」、と言います。

「それ、去年私のパパがポップジャックの誕生日にあげた時計に似てるわね。」ポップチャートが言いました。

ポップロックがポップチャートに何か言う前に、ポップタートがポップジャックにグーンズのことを聞きました。「グーンズの調子はどうだい？ あいつら、まだバカやってるのかい？」

ポップタートは、グーンズの一人が、放課後クラスメートの女の子をいじめているのを見たときのことを話していたのです。彼女が歩道に本を落としたのを見たグーンズの1人がその本を拾いました。グーンズらは、本を返すことを条件に女の子にお金を払わせたのです。ポップタートはその女の子が泣きながら家に走り帰るのを見たのでした。

ポップクイズが、言います、「そう、もうグーンズにはうんざりだよ。いつもぼくたちを振りまわしてる。学校では僕らの食べ物取り上げて、放課後はお金をとりあげる。いつもぼくに宿題をさせるんだ。」

ポップタートが、ポップクイズのキャンディ・バッグに手を伸ばしキャンディを取ります。バッグはキャンディでいっぱい、ジャケットのポケットから落ちそうです。

「ポップクイズ、キャンディを少しちょうだい。君はいつもキャンディ食べているよね。」とポップタートはツツツシーロールの包み紙をはがしながら言いました。

「もううんざりだし、うんざりするのにもうんざりだ。グーンズにもうんざりだ。実際のところ、どうかなりそうだよ。」ポップクイズは続けて意見を言いました。

「そうだよ。」ポップタートがいきなり、次のツツツシーロールをかみながら言いました。「グーンズはいつも自分のことしか考えてないんだ。いつもいじめてさ、何かとろうとしているんだ。」

歌を歌うのが大好きなポップチャートが、こう付け加えます、「彼らはいつもチャレンジで私たちをやっつけるわよね。チャレンジに歌の部門があったらいいのに。私が心をこめて歌うから私たちが勝つのに。」ポップチャートは口を大きく開け、セレナの歌を歌い始めました。

「そうだよ。タレント部門があったら、ポップチャートが歌って、僕が踊れる。こんなふうに踊るんだ、、、」とポップロックが言います。自然に体を動かし、頭の中に流れる音に合わせて踊りました。

「本当に、グーンズに見せてやれるのに。」とポップチャートは興奮して言います。

ポップジャックは、ずっと注意深く、みんながグーンズのことを話すのを観察していました。ある考えが彼の頭に浮かんできていました。

ポップジャックはみんなに向かって、「今朝もグーンズに配達にいったけど、いつものように石を投げつけられたよ。」

「なんであいつらはそんなに意地悪なんだ？」とポップタートはスニッカーズを食べながら聞きます。「あいつらはいつもばかやってるんだ。ぼくらが嫌いなのさ。」

「ああ、頭冷やすべきだよ。コントロールしなきゃ。こんなふうにはうまくな。。。」ポップロックが言い、別のダンスナンバーに合わせて体をなめらかに動かします。

「パッパが、「お前達は難問に立ち向かわなきゃいけない」って言ってたよ。」、とポップジャックがみんなに言いました。「グーンズが僕たちに何をしたかを話すのはやめて、それに対して何かしなきゃいけないんだ。」

「たとえば何、ポップジャック？ みんな私たちより2倍も大きいわよ。闘えないわ。」、とポップチャートは言いました。

ポップタートは、歯に挟まっているキャラメルをつまみ取って、大声でいいます、「おお無理、闘えないよ。こてんぱんにやっつけられるのはいやだよ。あいつらが去年学校でピンポップにしたことを見たんだ。」

「ああ、あれはひどかったわね。」ポップチャートが顔をゆがめて言いました。

「けんかしようって言ってるんじゃないんだ。」、とポップジャックが言いました。

「よかった。だってピンポップにしたこと見たもん。」ポップタートはほっとしたようです。

「チャレンジで彼らをやっつけようって言ってるんだよ。」ポップジャックが声を大きくして言います。

「チャレンジ？」みんな一斉に聞きます。

「でも彼らは20年連続で勝っているのよ。」ポップチャートの声は、やる気なさそうです。

「そうだよ、1回目からね。」ポップロックがつぶやきます。

「で、ぼくの計算によれば、僕たちが勝つ確率は正確に1.23%だよ。」とポップクイズがはっきりと言いました。

「それって、100分の1くらいじゃないの。」ポップチャートは絶望的な感じですか。「ということは、やつらを一回負かすには100回挑戦しないとイケないってことか。」

「プラス、去年の2番目にいいタイムを200.25秒縮めないといけないよ。」

「200.25秒？」みんなポップクイズを見ました。

「それって何分？」ポップロックが聞きます。

「200.25秒を60秒で割るんだ。」とポップジャックが言います。

「そう、その通り。学校で習ったよ。」ポップタートが言いました。

「3分くらいかな。」ポップジャックが答えます。

「3分33秒だよ、正確には。」とポップクイズが付け加えます。

ポップジャックがみんなを見ました。みな伏し目がちで背中を丸めています。あまり勇気づけられたようには見えません。

「できるって信じなきゃ。」ポップジャックがみんなに言います。「パッパが、競争の半分は才能で、残りの半分は勇気、意志、そして希望だって教えてくれたよ。もし僕らが、グーンズをやっつけようっていう勇気、意志、希望を持てば、勝てるさ。」

「がんばろうよ。勇気、意志、希望。」ポップジャックは情熱を持って繰り返します。

「そうよ、、、勇気、意志、希望。」ポップチャートの声が急に楽しそうになりました。

「勇気、意志、希望。」ポップクイズも興奮して繰り返します。

みんな一緒に言い始めました、「勇気、意志、希望」と催眠術にかかったように。みんな大きな声で笑い、飛び跳ねました。ポップチャートがその言葉に合わせて大きな声で歌い、ポップロックが楽しげに踊りました。みんな元気いっぱいです。みんな笑って、そのあとポップクイズのキャンディを食べながらくすくす笑いました。

「チャレンジまでちょうど2か月トレーニングできるよ。ポップロック、君の家の地下室にトレーニングルームあるよね。そこで始めたらどうかな？」とポップクイズが尋ねました。

「それはいい考えだけど、、、でも、でも。。。」ポップロックは困った様子です。

「でも、何？」ポップジャックが聞きます。

「親がたぶん友達を連れてくるのはだめだって言うよ。君はいいけど、ポップジャック。」ポップロックの顔が赤くなりました。

「僕の地区の人もどうせ行かせてくれないし。」とポップタートが言いました。

「私の親もカンカンに怒るわ。」とポップチャートも言いました。

「ぼくのところもそう。みんなこれに関してはうんざりするくらい筋が通らないんだ。」とポップクイズが断言しました。

ポップジャックは驚きました。「じゃ、君たちお互いの家に一度も行ったことないのかい？」

「なし。親が行かせないてくれないの。ポップジャック、あなただけよ、どこでも行けるのは。みんなあなたが好きだもの。」ポップチャートがポップジャックに言いました。

今度はポップジャックの顔が赤くなりました。はにかんだようにこう言いました、「でも、みんなじゃないよ。グーンズは違う。わかった、じゃこうしよう。毎日3時にここに集まってトレーニングしよう。」

ポップジャックは続けて、「みんな知っているように、チャレンジには5つの種目があるよね。」

「私、カヤックがいい。」ポップチャートが口を挟みます。

ポップジャックは、バッグからペンとメモを取り出し、書き始めます。ポップチャートはカヤックの音を作り、歌いだしました。みんなが彼女を見て、びっくりして頭を振ります。

「ぼく泳ぎたい。」ポップタートが、ポップタートを噛みながら言いました。ポップクイズのキャンディはなくなってしまいました。

「でもあなた泳ぎ方知らないじゃないの。」ポップチャートが言います。

ポップタートは囁むのをやめて、「好き嫌いはやめるんだ。習いたいの。助けてよ。」と言いました。

「僕らが教えるさ。」ポップジャックがポップタートに言います。「君はどうだい、ポップクイズ?」

「僕は走りたい。」ポップクイズがニヤッと笑います。

「ポップロック、君は?」ポップジャックが興奮してメモをペンでとんとんと叩きます。

「ダンスしたい。」ポップロックは踊りだし、そしてやめました。「冗談だよ。丘に登りたい。」とまじめに言いました。

「となると、残るは僕の大好きな、サイクリングだね。」ポップジャックはメモを見て、そしてみんなを見ました。「僕らは岩よりも強い石になるんだ。このコミュニティで一番尊敬されている人にあやかって、僕らのチーム名はパップストーンズにしよう。この大会で嵐を呼んで、グーンズたちの行進に雨を降らせる。あいつら、僕らが来たら、雷を聞いて、稲妻を見るさ。石みたいにグーンズを倒すんだ!」

そしてみんな大騒ぎしました。

## チャプター 6

その夜、ポップジャックはチャレンジのことで興奮してよく眠れませんでした。彼はチームのためにすばらしい考えを持っていて、パッパにそれを話すのが待ち遠しくて仕方ありませんでした。やっと朝が来て、ポップジャックはあまり勢いよくドアを飛び出したので、新聞とグッズ・バッグを忘れてしまいました。家に戻り、バングをつかみ、ドアを閉めました。一輪車に飛び乗り、大きな松の木までこいで行きました。パッパのお気に入りの釣り場です。

パッパは釣竿を片手に、もう一方の手にバスケットボールを持って座っていました。

「パッパポップ。何がゆれているのさ?」

「私の釣竿じゃないさ。私のだったらいいがな、ジュニアポップ」

「何か釣れた?」

「ああ、ブルヘッドを2匹ばかりな。そこのバケツに入っているよ。」木の幹に立てかけられている古い茶色のプラスチックのバケツを指差しました。

「それはそうと何のために釣りをしているの?」

「ニジマス、ブリーム、なまず、ウォールアイ、かめ、カエル、なんでもさ。私のえさを取るやつは、私が全部しゃっかり揚げて、フライパンを魚くさくしてやるさ。」パッパはくっくっと笑いました。

「魚のことで嘘は言わんさ。食べていかなきゃならんからな。お前が私のえさに食いついたら、巻き上げるからな。」とパッパはポップジャックに言いました。

2人は、一緒に静かに座っていました、そして静かな湖を見つめました。穏やかな水面が、チャレンジに興奮していたポップジャックを落ち着かせます。そして彼はしばらく考えました。

ポチャ、ポチャ。小さな魚が静かな水面を揺らしました。ポップジャックが沈黙を破ります。

「パッパ、聞きたいことがあるんだ。ポップピルのみんなのために大きなバーベキュー・パーティーをするとどれくらいお金がかかるかな？」

「みんな？」

「そう、みんな。」

「少なくとも 500 ドルはするんじゃないか、ポップジャック。」とパッパは言いました。バスケットボールをおいて、蚊がさした腕を掻きました。「私はもう 20 年、この町をまとめようとしているが、もしみんなが何かを一緒にやるとしたら、それは奇跡だな。」

2 人はまた黙りました。ポップジャックは深く考えこみ、パッパはえさをつかえます。

「奇跡なんだ？」ポップジャックが自問自答します。

「お前は、他の若いやつらとは本当に違うな、ポップジャック。高い洋服を着たり、宝石やイヤリングを付けているわけでもない。どこでお金を使っているのかわからんよ、ジュニアポップ。」パッパはえさを変えながら言いました。

「パッパ、僕は何か特別な、特別な日のためにお金をためているんだ。」

「特別な日。そうか。」パッパはバスケットボールを拾い上げます。「お前は本当に私のフィンガースクープをとめられると思うのかい？」

「誰がパッパのフィンガースクープをとめられるのかわからないよ。パッパは最高だからね。」

「私が最高だと言ったか、ジュニアポップ」パッパの目が輝きます。「つま先が良くなるまで待ってくれ。そのときは本当に私が最高になるさ。」

「そうだよ、パッパポップ。誰よりも最高さ。つま先が治ってパッパがフィンガースクープするのを早く見たいみたいよ。」ポップジャックがパッパに微笑みかけます。

「ジュニアポップ、今日は何をするんだね？」

「配達が終わって 2,3 やることやって、その後、練習さ。」

「練習てなんの？」

ポップジャックの顔が、その質問を聞いて輝きました。そして、昨日感じた気持ちの高揚をまた感じました。

「チャレンジのための練習さ。」大きな声で言います。

「おお、チームができたのか？」パッパは興味津々です。

「そう、いつも遊んでるチビポップたちさ。」

「それがお前のチームか？」パッパは驚いたようです。

「そうだよ。それが僕のチームだよ。」ポップジャックは、自信なさげです。パッパの目を見ながら、こう尋ねます。「正直に言ってよ、パッパ。厳しいと思っているんでしょ？」

パッパはポップジャックの目を見て、言いました、「正直に言うよ、ジュニアポップ。厳しいと思う。でも私が言ったこと覚えているだろ。何事も可能だよ、、、」

「勇気、意志、希望がある限りはね、でしょ。」とポップジャックが残りのセリフを言いました。

「お前のチームはそれがあるかい？」

「あると思うよ、パッパ。」

2人は、湖に向きなおりました。今朝は少し曇り空、でも日差しが灰色の雲を突き抜けて来ようと頑張っているようです。パッパは竿を引き、魚がえさに食いつくようにします。

「口で言うだけなら簡単だ。」リールを巻きえさがまだついているか確認しながら、パッパが言います。「努力しないといけないぞ。おそれずに難関に立ち向かわないとだめだ。一生懸命練習するんだ。」

えさは釣り針にはありません。パッパは釣り箱に手を伸ばし、えさを取り出します。

「つま先の手術を受けたら私がやりたいのはそれさ。昔コートでやっていたことがまたできるようにトレーニングするのさ。」パッパが言いました。

## チャプター 7

トレーニングの最初の週、パッパストーンズ・チームはぶざまでした。ひどい状態だったので、トレーニングはかなりのスロースタートとなりました。みんなはポップタートに泳ぎ方を教えようとしてました。ポップタートが初めて水の中に入ったとき、彼は石のように沈んでしまいました。

「これで、何で私たちがパッパストーンズってチーム名なのかわかるわね。」、とポップチャートが皮肉たっぷりに言います。

でもポップタートは、飲み込みが早く、すぐに背中で水に浮かぶ方法を覚え、背泳ぎで早く泳げるようになりました。また、大好物のポップターツも、ポップクイズのキャンディも減らしました。

ポップチャートはカヤックを練習したとき、こんなに力が入るのかと信じられませんでした。何日も腕が筋肉痛になりました。水の流れにも不平をよく言いました。湖が彼女に逆らっていると。

一方ポップクイズも、陸上で苦戦していました。足が速いほうではなかったのです。勢いよく走り始めるのですが、すぐに力尽きてあっという間にペースダウンしてしまいます。彼もまた胃が痛いによく不平を言いました。

「トレーニング中はキャンディの数減らしたほうがいいわね、ポップクイズ。」とポップチャートがポップクイズに言いました。「たぶんおおなかが痛くなるのはキャンディのせいよ。」

湖の中ほどにある丘も、ポップロックにとって大きな試練でした。彼はよく集中力を無くし、すべりました。

ポップジャックは一輪車ではとても早く走りますが、なぜだか自転車だと同じように走れません。チームのことがだんだん心配になってきました。

「こんなに疲れたことないよ。」、とポップロックは息も切れ切れに言います。ポップジャックのバッグに入っている冷たくて、新鮮なお水が入ったボトルを見ました。「今日はそのお水いくらだい、ポップジャック？」

「特別な水だから、ただだよ。」ポップジャックが答えます。

「ただ？ まさか。でもすごい。」ポップチャートがボトルを2本つかみます。

「心臓発作でも起こしそうだよ。」、とポップクイズ。

「なんだか、」、言い終える前に、ポップタートは、緑の芝生の上に膝まつき、吐いてしまいました。

「おえー、それ全部水じゃないの。」ポップチャートが鼻をつまみます。

「湖を飲みほすくらい飲んだんだよ。」、とポップジャックが言いました。

「私たち望みないかしら。」、とポップチャートがポップジャックに言います。

「全然なし。」ポップロックが同意します。

「可能性ゼロだね。」、とポップクイズも。

「グーンズをやっつけるには奇跡が必要だよ。」、ポップロックが言いました。

魚がえさに食いつくのを待ちながら、パッパはポップジャックや彼の友達が練習しているのをいつもの松の木から見ていました。彼らのやる気には感心していましたが、だらっと座っているのを見ると、もうそのやる気も失せてしまっているようです。石の間に釣竿を置き、杖とバスケットボールを拾い上げ、彼らのところに歩いてきました。パッパが自分たちのほうに歩いてくるのを見て彼らは驚きました。

「パッパ。何事だい？」ポップタートが聞きます。

「オラ(こんにちは)、パッパ。コモエスタス ウステ(お元気ですか)?」ポップチャートがあいさつします。

「パッパ、こんにちは、いかがですか？」ポップロックが手を振ります。

「パッパ、何かあったの?」、とポップクイズが口についた水をぬぐいながら尋ねます。

「そうだよ、パッパ。どうしたの? いつもの場所で釣りをしていると思っていたよ。」ポップジャックが言います。

「ああ、今日はもう終わりだ。みんながここで練習しているのが見えたんでな。」パッパが言います。

「見たの?」ポップジャックが聞きます。

「言わなくていいわ、パッパ。ひどいもんでしょ。」ポップチャートが元気なさげに言います。

「そう、俺たちひどいの。奇跡が必要だよ。」ポップロックが言います。

「奇跡なんかいらないよ。お前たちには勇気と、意志と、希望が必要なんだ。」パッパの声は深くそして自信にあふれています。

「悪いけど、パッパ。でも僕たちにはそれ以上のものが必要だよ。お祈りだ。」、とポップタートが泣きます。

パッパが、彼らの伏し目がちな顔を見て言います、「困難に立ち向かわないとだめだぞ。昔私がバスケットボールをしているときは、プレー中にブルースを聴くのが好きだったよ。コートにラジオを持ち込めない時は、頭の中でブルースを流した。それで気分がよくなってリラックスできたんだ。お前たちも気分がよくなってリラックスできることをするんだ。ポップタート、お前の気分がよくなってリラックスできるものはなんだ?」

「正直言って、ブルーベリー・ポップターツに勝るものは何もないよ。」、とポップタートは恥ずかしげに言います。

「じゃ、ブルーベリー・ポップターツを泳ぐときに考えるんだ。ポップチャート、君の気分がよくなってリラックスできるものはなんだね？」

「知ってるでしょう、パッパ。」

「歌うことかい？」

「その通り。」

「それじゃ」パッパは彼女に微笑みながら、「カヤックをするときは、君の好きな歌を歌うんだよ。ポップロック、君はどうかね？」

「踊ることさ。」

「お前は、丘を越えるときにムーンウォークをするんだ。ポップクイズは？」

「いい本を読むことに勝るものはないな。」

「ここに君の好きな本を持ってきなさい。走りながら読むんだ。ランニングコースのどこに段差があるかわかるかい？」

「ああ、コースを調べたらわかるさ。そしたら走りながら読めるよ。」

「ポップジャック、お前はどうか？ お前の気分をよくしてリラックスさせてくれるものは何だね？」

「知ってるでしょう、パッパ。一輪車に乗っているときに最高さ。」

「そうか。じゃ、自転車に乗っているときは、自分の一輪車に乗っているところをイメージするんだ。明日の練習でまたここで会おう。」

パッパがそんなことを言ったので、みんなはびっくり仰天しました。パッパがバスケットボールを片手でつき、もう一方の片手で杖をついてゆっくり歩いていくのを見んなは眺めました。パッパストーンズ・チームはコーチを見つけたのです。

パッパをコーチに得て、パッパストーンズ・チームはめきめき上達しました。みんなの集中力と決意が高まっていったのです。そして、みんな練習をとっても楽しみました。

背泳ぎの間、ポップターツは空を見上げ、雲がブルーベリー・ポップターツだと想像しました。腕が空に届いて、雲のブルーベリー・ポップターツをつかむような感じで、彼はどんどん速く泳ぎました。

カヤックをしているとき、ポップチャートのきれいな声が、湖にこだまします。町全体が彼女の観客です。

ポップクイズは、段差を予想して走りながら、ペースをつかむことを学びました。大好きな本、ハッシュを、必要になった時に備えて胸の近くにしまいこみました。

ポップロックは、丘がダンスフロアだと思い、頭の中で好きな音を流し、元気いっぱい丘をムーンウォークしました。

ポップジャックは、まるで一輪車に乗っているかのように、自転車を手放して乗りました。スピードを出しているときの、風が顔をなでる感触が大好きでした。

## チャプター 8

ポップビルの町の人みんなが、ポップビル・チャレンジのためにレークパークに集まりました。緊張と興奮にあたりは包まれています。人々は、いろいろな地区ごとに集まり、お気に入りの場所でピクニックしています。数匹の犬が鳥を追い払い、小さな

子供たちがその犬を追いかけしています。まぶしい太陽の光と青い空が、この日をチャレンジ日和にしてくれています。

パップストーンズ・チームは、お揃いのユニフォームを着ています。シャツの前側には、赤、黄、青、緑、黒のストライプの旗マークが入っています。彼らの番号がそのシャツの背中に貼ってあります。パップもまたユニフォームを着て、首に笛とストップウォッチをかけています。

グリーンズが、駐車場の近くでたむろしていて、笑ったり、生意気に振舞ったりしています。彼らのジャージには「21年連続」という文字が書いてあります。彼らのファンもまた同じ「21年連続」というサインを持っています。

アナウンサーがチャレンジの紹介を行い、鴨笛をマイクに向かって吹き、正式にコンテストの開始を宣言しました。人々がその音を聞き、湖近くのスタート地点に集まってきました。

4つのチームが参加しています。最初の種目は水泳。ポップタートはとても緊張しています。緊張で胃がゴロゴロ鳴っているのも、ポップターツを食べて気持ちを落ち着かせようかと考えました。

「大丈夫、できるよ、ポップタート！」パップが励まします。

ピストルが鳴り、第一走者が水に飛び込みました。ポップタートはゆっくりと泳ぎ始めました。チームメイトがレース前、ポップタートがポップターツを食べないようにしていたので、胃があまりにもゴロゴロと鳴ってしまい、ちゃんと泳ぎきれとは思いませんでした。でも、その後、ポップタートは空にポップターツを見ました。そしてパップが、「ゴールでポップターツ持って待ってるぞー!」、と叫んでいるのが聞こえました。ポップタートは4位でゴールに入りましたが、1位のチームからそれほど離れてはいませんでした。

ポップタートがゴールするとすぐに、ポップチャートがカヤックを始めました。

「リラックスして歌うんだ。そうしたらみんなが君の歌を聴くことができるからな!」、とパップが叫びます。

ポップチャートがやさしく歌い始め、だんだんと声を大きくしていきます。声が大きくなるごとに勢いを増していきます。ポップチャートのきれいな歌声で彼女が1人追い越して行くのを見て、観衆は驚きます。3位に上がってきたのです。

「あの子はなにか特別なものを持っているよな?」、とパップが隣に立っている人に誇らしげに言います。

ポップチャートがゴールすると、ポップクイズが走り始めました。あまりエネルギーを使いすぎて、また最下位に戻ってしまいます。

パップが、ポップクイズが疲れて集中力をなくしていくのを見て叫びます。「本を思い出して、段差を計算するんだ、ポップクイズ!」

ポップクイズは「ハシエット」と取り出し、好きな一節を読み、段差を計算し始めます。すると勢いを取り戻し、2位でゴールに入りました。

ポップクイズがゴールに入るとすぐにポップロックが丘を登り始めます。2位で登っていましたが、よろめいて丘の一番低いところに落ちてしまいました。

「ムーンウォークをするんだ。マイケル・ジャクソンみたいに!」パップがポップロックに叫びます。

ポップロックはフル回転で丘をムーンウォークして昇り、勢いを取り戻し3位になります。観衆が熱狂します。

ポップロックがゴールすると、すぐにポップジャックが自転車のペダルをこぎ出しました。観衆の応援が聞こえ、パッパが叫んでいます、「速いぞ、速いぞ!」

湖を半分行ったところで、急にパン、パン、と音がしました。自転車の前のタイヤが何か鋭いものの上を走ってしまったのです。ポップジャックはコントロールを失ってしまいます。前のタイヤが完全にダメになってしまいました。ポップジャックがなんとか自転車を木にぶつけないように走ろうとしているのを見て、観衆はショックを受けています。

「ああ。」ポップロックが叫びます。

「衝突してしまうよっ!」ポップクイズも叫びます。

ポップジャックは自転車から飛び降り、辛うじて木を避けました。

「一輪車だよ! 一輪車にするんだ!」パッパが叫びます。

ポップジャックは、観衆の中から一輪車について何か言っているのを聞きます。そして壊れた自転車を起こしました。前の部分をつぶして、一輪車に作り変えました。そしてその一輪車に乗り、まるで一度も倒れたことがないかのように走り出しました。

すぐに勢いを取り戻しました。2位になり、あと200mを残すばかりです。観衆の応援がどんどん大きくなっていきます。ポップジャックは、最初のポップビル・バーベキュー大会のことを考え始めました。すばらしい陽気な人々とたくさんのおいしい食べ物进行を想像します。ポップジャックは、エネルギーを爆発させ、勢いよく前進します。

ポップジャックがグリーンポップを抜き、ゴールラインを駆け抜けるときの、応援の声は耳をわらんばかりでした。観衆は狂喜乱舞しました。

「やった、やったぞー!」パッパが叫び、片足で飛び跳ねます。

ポップジャックのチームメイトが彼に駆け寄り、ハグし、背中をたたきます。彼らの家族や友達も仲間の後ろにいて、互いに握手をしたり、ハイファイブしています。

「やったな、ポップジャック!」、とパッパが彼に言い、大きく温かなハグをします。そしてパッパストーンズ・チームのみんなをハグしました。

「本当にやったね!」ポップジャックが大きな声で言います。

勝利チームの一人ひとりが賞金100ドル受け取りました。ポップジャックも受取り、ポケットにしまえます。そしてパッパのところに行きました。

「パッパ、このお金をつま先の手術費用にあててほしいんだ。」ポップジャックは賞金を取り出し、パッパに渡します。

「ああ、だめだよ、ポップジャック。受け取れないよ。」パッパが言います。

「パッパがコーチしてくれなかったら、僕ら勝てなかったよ。」とポップジャックがパッパに言いました。

パッパはポップジャックに微笑みかけ、もう1回大きく温かいハグをしました。

パッパストーンズ・チームのほかのメンバーは、賞金をどう使うか話し合っていました。

「私は、ほんとうにいい音楽を買うわ。」とポップチャートがみんなに言いました。

「僕は前からずっと本屋さんにある百科事典のセットが欲しかったんだ。」とポップクイズ。

「おい、ポップジャックを見てみろよ。」ポップタートが言います。「あいつ何してるんだ?」

ポップジャックがパッパに賞金を渡しています。みんなは互いを見合い、理解しました。パッパの手術のことを知っていたのです。促されるまでもなく、みんなはパッパに歩みより、賞金を渡しました。パッパはみんなの寛大な心に圧倒されて、少し涙ぐんでいました。

「お前たちはみんな、勇気があって、意志が強くて、希望を持った子供たちだな。」パッパはみんなを抱きながら言いました。「オバマ大統領はきっとお前たちを誇りに思うよ。」

## チャプター 9

ひと月後、レークパークはまた多くの人々であふれかえっています。後ろにはオバマ大統領の大きな画があります。今日は、ポップビルのそれぞれの地区が別々に公園に集まっているのではなく、人々の本当の集まりがあります。ポップジャックは彼が計画したイベントを主催するためにお金をためていたのです。それをポップジャックは、「第1回ポップビル・バーベキュー大会」と呼びました。みんなが招待されました。グーンズでさえもです。

円形劇場が用意され、ポップロックがダンスを踊り、ポップチャートが歌を歌います。パッパは横にあるコートでバスケットをしています。彼の有名な「フィンガースクープ」を披露しています。ポップジャックはブースを設けて、自分の商品を買っています。近所の人々が歩き回り話をし、楽しんでいきます。友情と笑いの音が眠るように穏やかな湖を起こしました。

## 学んだこと

### 考えること

ポップビルという町は20年間ばらばらでした。でもポップジャックはみんなと仲良くしていたようです。なぜ町の人々はポップジャックが好きなのでしょう? 彼はどうやってみんなと交流しているのでしょうか? 彼はカメレオンなのです。カメレオンの意味を知っていますか? なぜ人生の中でカメレオンでいることが都合がいいのでしょうか?

### 考えること

ポップジャックの仲間たちのそれぞれの性格を説明してください。ポップジャックは他の仲間たちとどう違うのでしょうか? なぜ彼がリーダーなのでしょう?

### 考えること

チームメートの一人ひとりが他のチームメートをよくしようと努力しなければなりません---ときどきそれは彼らを元気づけたり、励ますことを意味します。チー

ムの強さは、一番弱いメンバーによって決まるのです。パッパが言うように、何かを上手になりたいのなら、何か好きなことと関連させるようにしなければなりません。そうすると自分自身を奮起させることができるのです。パッパストーンズ・チームのメンバーは、自分の種目をそれぞれの好きなことと関連づけることができたから上達したのです。

ポップチャートはどうやってカヤックが上手になったのでしょうか？  
ポップタートはどうやって泳ぎが上手になったのでしょうか？  
ポップクイズはどうやって上手く走れるようになったのでしょうか？  
ポップロックはどうやって丘をうまく登れるようになったのでしょうか？  
ポップジャックはどうやって自転車をうまく乗れるようになったのでしょうか？  
何かを上手くできるようになるために、あなたなら何をしたいですか？

#### 考えること

パッパストーンズ・チームは一体どうやって体の大きなグーンズを負かしたのでしょうか？ 何が起こったのでしょうか？  
ポップジャックは、賞金の100ドルをパッパのつま先の手術ために差し出しました。他の仲間たちも彼にならいました。なぜこれが大事なことなのでしょう？

#### 考えること

ポップジャックは自分の言葉を信じ、20年間バラバラだった町をついに1つにすることができました。この10歳のこどもが、他の誰もできなかったことをどうやってなしとげたのでしょうか？ なぜポップジャックは、第1回目のポップビル・バーベキュー大会にグーンズを招いたのでしょうか？ この物語からあなたが学んだことは何ですか？